

いぐさ「ひのはるか」の「3月初め植付7月末収穫」の栽培技術

「ひのはるか」は、「3月初め植付7月末収穫」の栽培期間で、慣行の晩刈作期と同等の収量が確保できる。その際の耕種概要は、植付時の苗の大きさは20本、栽植密度は28株/m<sup>2</sup>とする。生育量の指標としては、先刈時(5月20日頃)の一株茎数を90本確保する必要がある。

農業研究センターい業研究所育種栽培研究室(担当者:高森幸光)

研究のねらい

いぐさ新品種「ひのはるか」は、「ひのみどり」の後(7月15日以降)に収穫する晩刈用として県の奨励品種に採用された。収穫時期試験においては7月6半旬に収穫しても品質低下が認められなかった。そこでこの特性を活かして、3月初め植付・7月末収穫でも慣行栽培と同等の収量が確保できる栽培技術を検討する。なお、植付時期移動による12月の株分け移植労力の削減分を活用し、畳単価の高い年内により多くの生産販売が可能となることから、農家の所得向上にも寄与できる可能性がある。

研究の成果

1. 植付時の苗の大きさは20本が適当であり、栽植密度は28.0株/m<sup>2</sup>は必要である(図1)。
2. 先刈時期(5月20日頃)の茎数は、90本(28.0株/m<sup>2</sup>の場合)を確保する(図2・3)。
3. 「ひのはるか」の収穫時茎長は、普通刈・晩刈栽培とほとんど差が無く、平成20年産では約10cm長かった(表2)。
4. 105cm以上の収量は、普通刈・晩刈に比べてほとんど減少しない(図4)。
5. 慣行栽培に比べて栽培期間が短く、12月から2月までの雑草防除が不要となり、少なくとも除草剤使用回数が2回は削減できる。
6. 植付時期が3月に移動することから、その分年内の畳表製織時間が確保され、畳単価が高い時期での出荷が可能となり、植付作業の労力分散並びに農家経営にも寄与できる(表3)。

普及上の留意点

1. 使用した苗は、通常の八月苗に冬期の追肥を施用し育苗した(表1)。  
植付苗を大きくするため、苗床の面積を広く確保する必要がある。  
今後、この植付時期に適する育苗技術(植付時期・肥培管理等)の開発が必要である。
2. 基肥は窒素4kg/10a、植付30日後に窒素2kg/10a施用した(表1)。
3. 必要な苗の大きさ(20本/株)を確保するため、手植えとする。
4. 雑草対策として、植付直後に土壌処理除草剤を必ず散布する。
5. この技術は、い業研究所(八代市鏡町)において、2008(平成20)年産及び、2009(平成21)年産の栽培試験結果である。

表1 使用八月苗と本田の試験構成

年産	作期	八月苗耕種 基準他の追肥	植付日	基肥 kg/10a	活着肥 kg/10a	苗の大きさ 本/株	栽植密度 株/m <sup>2</sup>	収穫日
20年	3月植	12月下旬 2 kg/10a	2月29日	4	2	15・20・25	28.0・30.9	7月28日
20年	普通刈	-	12月14日	6	-	8	28.0	7月14日
21年	3月植	1月下旬 2 kg/10a	3月6日	4	2	15・20	28.0・30.9	7月27日
21年	普通刈	-	12月12日	6	-	8	28.0	7月15日
21年	晩刈	-	12月20日	6	-	8	27.8	7月22日

注： 施肥量は窒素成分、 苗の大きさは15cm以上の茎数  
栽植密度の栽植様式(条間×株間)：28.0=21×17cm、30.9=18×18cm、27.8=20×18cm

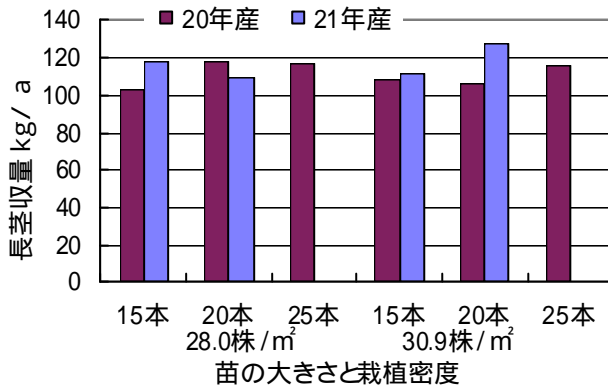


表2 処理及び作期による収穫時茎長

処理及び作期	20年産	21年産
15本 28株/m <sup>2</sup>	150 cm	150 cm
20本 同上	152	152
25本 同上	151	-
普通刈	142	152
晩刈	-	147

図1 苗の大きさ及び栽植密度と長茎(105cm以上)収量(20・21年産)

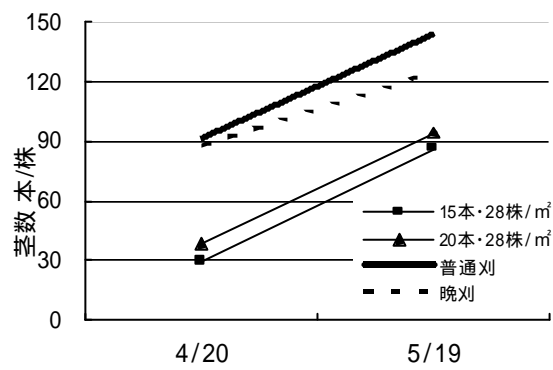
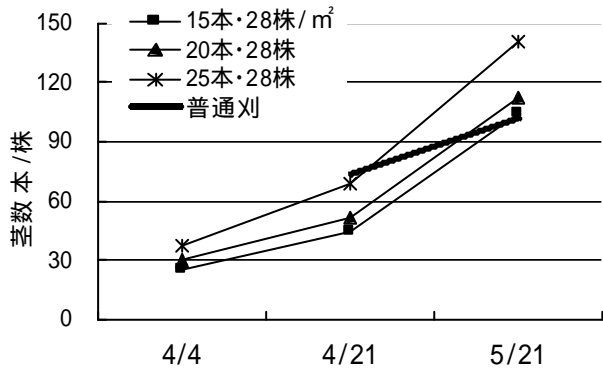


図2 茎数の推移(20年産)

図3 茎数の推移(21年産)

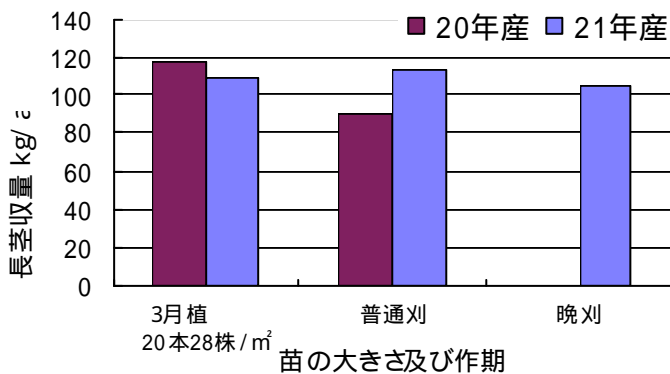


表3 時期別の畳表単価(円/枚)

品目	1 2月	3月
麻三種	1,610	1,411

注：JA やつしろい業センター資料  
単価は過去5年の平均値

図4 作期別の長茎(105cm以上)収量(20・21年産)